

## 予言者としてではなく

大江健三郎は五十年を超える作家活動のほとんどの時期を、原子力および原子力を前提とした国家体制に対する批判に費やしてきた。エッセイ、講演、対談、座談会で核兵器の開発・武装を続ける大国や、広島・長崎の惨禍を経ながら、そのうちの一つであるアメリカと同盟する日本への批判を行ってきた<sup>1</sup>。大江健三郎が小説を書く前提は現代が「核時代」「アトミック・エイジ」であることなのだ<sup>2</sup>。その中には核爆弾だけではなく、原子力発電所の存在、さらにそれについての報道に対する批判も含まれている。大江健三郎が様々なところで語ってきたものを読み直していると、これまで必ずしもリアリティがあるとは見なされてこなかった原子力の活用についての恐怖・危惧が、まるで現在起っている事態を予言していたようにも見えてくる。

実際、大江健三郎の小説が実際の事件を予言したように働いたことが二度あったと彼自身が語っている。一つは連合赤軍と「洪水はわが魂に及び」<sup>3</sup>（一九七三年）との関係、もう一つはオウム真理教と「燃え上がる緑の木」三部作（一九九三～五年）<sup>4</sup>との関係である。

私は六九年から『洪水はわが魂に及び』を構想し、政治的にはアナーキーな若者の集団が、商業的な見本として造られた民間向けの核シェルターに閉じこもり、機動隊に包囲されて銃撃戦を行なうシーンまで、数年かけて書き進めていました。そのような日のある朝、テレビの臨時ニュースによって、武装した活動家の一団が別荘地に籠城し、機動隊と銃撃戦を行なっている情景を見たのです。（中略）

そして、オウム真理教の無差別テロの報道に接した際私が感じとった衝撃は、「連合赤軍」の銃撃戦について私の辿ったと同じ方向への思考をもたらしたのです。私はオウム真理教の成員たちといかなるつながりも持たないのに、私の書き進めていた、新しい教会を建てるはずの若者たちの小説が、直接社会と対立せざるをえないという物語に、なぜなってしまうのか？

それは、「連合赤軍」の銃撃戦と私の小説との重なり合いと平行だ、と私は思いました。いま自分の生きている同時代が、現実の宗教集団を反社会の無差別テロに追いつめたと同様、自分の文学的な想像力もまた、当の同時代によってそこへ追いつめられていたというほかない、と私は考えたのでした。<sup>5</sup>

現実の事件と執筆中の小説が偶然と呼ぶのが困難なくらい類似した状況で結びついてしまったことへの驚きが語られている。東京電力福島第一原子力発電所の事故以後の状況を引用中の言葉を借りて説明するなら、「自分の生きている同時代が」原発周辺の人々を放射線や放射性物質の恐怖へと追いつめたと同様、大江健三郎の「文学的な想像力もまた、当の同時代によってそこへ追いつめられていた」ということになるだろう。冷戦状況、そしてその終了後も続く緊迫した「同時代」が、大江健三郎をして将来日本でも起るだろう深刻な事故を予言する小説やエッセイを書かせ続けたわけである。

ただ、何かの言葉を予言のようにとらえるのは、多くの場合言葉の〈空白〉を現実にした現象の要素で埋める作業でしかなく、原理的にあらゆる言葉は何かの事象を予言としたものとしてとらえることが可能なのである。異なっている細部に注目すれば、一見類似しているような現実と小説であっても全く異なる様相を備えたものに見えてくる。およそ作家や思想家を〈予言者〉として持ち上げるのは言葉と読みの関係について素朴すぎる態度だと言える。

そもそも今起っている原子力発電所の事故と、それに続けて起っている対応の不備、そして全ての隠蔽は、半世紀前から繰り返されてきた状況を背景として起っており、困ったことに実際には特別目新しい事態ではない。アメリカやイギリスといった当時の原子力先進国との関係で日本の原子力開発の進路が決定づけられたこと、原子力発電所を経営する産業界と官僚・政治家が癒着していること、その癒着した産官複合体が原子力の危険性を隠蔽して「平和利用」があたかも容易なことであるかのようにプロパガンダを行っていること。たとえば今からちょうど五十年前に刊行された河合武『不思議な国の原子力』<sup>6</sup>には、以上のような福島第一原子力発電所の事故以降頻りにマスメディアやインターネット上で話題になった状況が既に語られ尽している。それを読む限りでは、原発の事故が実際に起ってしまったからの、現在生じている様々な問題には想定されていなかった新しいことは何もないとも言える。

ひとりの人間が言葉を書きつけるにあたって、その言葉を書いている状態においてそ

のようにある人間としての自分を、全面的に許容することを目的とする。かれ自身に対して許容する言葉を自慰的につむぎだすのみならず、他者に対してなんとかその自己許容の言葉をまるごと認め、受けいれさせようとする。(中略) マス・コミュニケーションの治世での、広告の言葉もまたそのようなものだ。そのもっとも端的に今日の状況に根ざしている実例は、政府や電力会社が最近つづけさまに打ち出している原子力発電の宣伝広告である。この場合、許容されねばならぬものとしてそのようにあるままに呈示されるのは、一個の人間ではなく、原子力発電という人間支配の一構造であるけれども。原子力発電が人間支配の一構造である、という言葉に説明を附すならば、僕はそれが人間生活にあたえるものの規模の大きさ(ついには原子力発電によって膨大な量の電力を補給されていた都市生活が、その突然の電力供給の停止によってパニックをおこすほどにも原子力発電に大きく依存することになるが、われわれはいまそれよりほかにない唯一のものとして原子力発電を選ぶことから始めるのではない)、またそれが放射能汚染や温排水をつうじての海洋の温度のバランスの破壊による、人間への死の根源となりうる可能性の大きさを考えることによって、それを人間支配の一構造だとみなす。<sup>7</sup>

長文の引用になったが、これは一九七六年に発表されたものである。この記述もまた予言めいて読めてしまうのだが、今から三十五年前に「平和利用」を大義名分とする原子力発電所の開発が「人間支配の一構造」であることは大江健三郎によって指摘されていた。後述するように、それが具体的かつ詳細に明らかになったのが今の状況なのである。

本論では大江健三郎が核兵器や原子力発電所といった原子力をめぐって書いたテキストが、現在の状況と照らし合わせてどのような見取り図を示してくれるのか、ということ論じていきたい。ただし、それは起ってしまった事件と言葉とを予言のように結びつけるのではなく、起っていること、そしてこれから起っていくことをどのように受け止めてきたのか、というこれまでの活動を確認していくことになる。

大江健三郎の作品という参考書を通して現状の出来事を分析しようというのではなく、現状起っていることから大江健三郎のテキストを読み直そう、という試みである。正直なところ現在の事態になるまで大江健三郎をこれから述べるように読めなかった自身の鈍感さは恥じるしかない。予想される「いま、なぜ大江健三郎なのか」という問いに対しては、本論それ自体が答えになるとするなら幸いである、と記しておく。

## いかに原子力を知るか

大江健三郎が原子力をどのように問題化し語ってきたのか、初期から簡単に追ってみよう。

一九六一年の夏、大江健三郎は茨城県東海村の原子力研究所を訪れ、研究施設を見学している。その際に研究者の近藤達男・近藤靖子にインタビューをした記録が『世界の若者たち』(一九六二年)<sup>8</sup>に収められているが、前節でふれた『不思議な国の原子力』はその中で『原子力白書』と共に大江健三郎が言及している書名である。

大江 民間人が書いた『不思議な国の原子力』は暗黒物語だ。政府の『原子力白書(第三回)』を読んでみると、めでたし、めでたしで、日本の原子力開発の仕事はとにかく科学的にとらえられていない、危険なものだという印象でした。でも実際にここを見学すると、日本の科学者は現場でしっかりやってくれる、すばらしいと感じました。

このインタビューの中では政治家主導で強引に進められる原子力開発と、基礎研究の重要性を訴える現場の科学者との対比という図式で話が進んでいる。強い言い方をすれば科学の純粋性という幻想の中で、政治や経済の動きから自律して科学研究が行い得るという前提で和やかに対話が続けられている。それは同時に軍事利用と「平和利用」という二項対立も前提としており、原子力そのものが持つ暴力性やそれらが政治や経済、ひいては国家によって統制されるものだということが見過ごされている。この時点での原子力に対する大江健三郎の認識は素朴なものであったというしかない。

しかし、社会における科学の他律性については科学批判の文献を読むことで、この後認識を改めていくし<sup>9</sup>、原子力についてのとらえ方も大きく変っていく。その契機となるのはよく知られているように、第九回原水爆禁止世界大会に参加するために一九六三年八月に行った広島訪問である。大江健三郎はその翌年も広島を訪ねるが、その際のことは『ヒロシマノート』にまとめられており、被爆から長い時間が経っても、原爆症という形で暴力がふるわれ続けるということを知っていく過程が記されている<sup>10</sup>。

『ヒロシマノート』は原爆後の広島で生きる人々に出会った体験の記録であると同時に、広島に、原爆に関わる本に出会った記録でもある。『歯車』『ひろしまの河』、『ヒロシマの証言』『広島原爆医療史』『水ヲ下サイ』『さんげ』『ピカドン』『原爆体験記』、これらの雑誌や書籍、詩や新聞記事の名前とその引用が『ヒロシマノート』の多くを占めている。

また、広島や原爆とは直接関係のないベロー、エフトシェンコ、カミュといった作家のテキストが引用され、それが原爆後の広島を生きる人々に結びつけられている。始まりがそうであるように、大江健三郎の原子力との関わり方は基本的には文献の読書によるものであるようだ。『ヒロシマノート』の後も、ひとまとまりのエッセイは政治や原子力関係の文献と過去のテキストとを結びつけることで書かれている<sup>11</sup>。

これまでは、それが故に彼のエッセイなどの社会的な発言が現実と正しく切り結んでいないという批判がなされてきた。ただ、そこで批判のために招喚される〈現実〉は国家と癒着したマスメディアという企業組織によって作り出されてきたものでしかなかった。もし、大江健三郎に原子力への批判者としての優位性があるとすれば、最初の節に引用したようなマスメディアの言葉への批判的な認識を持ち続けていたこと、そして後述する数値の魔術にとらわれていなかったことにあるのだろう。

### 原子力と生政治、そして数値の抑圧

日本における原子力の研究・開発は戦争中の一九四一年に遡る。新型爆弾の開発を目指す軍用のものであり、基礎研究にとどまっていたものの、それは敗戦後の研究に継承されていった<sup>12</sup>。敗北した日本が原子力を開発・活用するのは、その敗北を克服し日本という国家の威信を世界に示すために必要な事業だったわけである。

原子力開発をめぐるのは、原子爆弾に始まる兵器としての利用と原子力発電所による電力確保や放射線を利用した医療などの「平和利用」という二つの道筋が対比的に捉えられてきた。最新の原子力白書も「我が国における原子力の研究、開発及び利用は、原子力基本法（昭和30年法律第186号）に則り、これを平和の目的に限り、安全の確保を旨として、民主的な運営の下に自主的に行い、成果を公開し、進んで国際協力に資することを基本方針としています」<sup>13</sup>と謳っている。兵器としての利用は認められないが、医療やエネルギー問題の解決のために「平和利用」は推進していくべきという説明によって「非核三原則」を建前上擁する日本で原子力発電や放射線についての研究と実践が認められてきた。

ところが、福島第一原子力発電所の事故以降明らかになったのは、国家が保有する核兵器だけではなく、「平和の目的に限」というふれこみの原子力発電所もまた暴力装置としての国家の一翼を担っているという事実である。それは放射線や放射性物質が直接に人体を破壊し、被害を与えるというだけではない。たとえば原発事故のために人が住める場所が制限され、これまで住んでいた場所から退去せねばならない人が生み出されてしまった。

さらに事故初期の「計画停電」や点検のための原発休止を理由とする電力不足に対応するための「節電」の励行が、これまでと同じ生活の継続を困難にしている。これは衣食住のうちの「住」にかかわる暴力性である。これに放射性物質を含む汚泥によって下水道の処理が困難になったことを付け加えてもいい。国家が決定した規制が人々の行動を制限し、また国家によって法律で統制された民間企業が人々の生活を支配していることが見えるようになった。そう、それ自体は今回新たに生じた状況ではないのだ。

他にも放射性物質が混じりこんでいる可能性のために料理や飲料のための上水道が利用できなくなり、また多くの食品が放射能検査を経なければ市場に並ぶことが出来なくなった（それどころか検査の結果廃棄されることになった食品も多い）。これは「食」に対して暴力がふるわれたものととらえられることができる。もちろん、それらの水や食品が何の検査も経ずに飲食されることから生じる問題は未然に防がれたわけだが、人々が自由に飲食をしているのではなく、実際は国家が食生活を統制し、飲食して良いものと良くないものとのを決めているという潜在的な力が明らかにされた。もちろんその規制に従わず飲食することもできるわけだが、後述するようにそのような異端者は社会で生活することが困難になってしまうだろう。

また、原子力は政治や行政、そして経済活動の優先順位まで暴力的に変動させてしまう。まず、何をおいても原子力発電所の導入を、なぜならそれが地域のインフラの整備を可能にし経済的な発展を呼びこむのだから。原発事故が起きればまずはそれへの対応を、なぜなら元いた土地に戻り元のような生活を取り戻すためには、原発を放っておくことはできないのだから。

食住にかかわる生活の基盤やライフライン、人間の日常的な生に関わる部分が国家と企業、そしてマスメディアによってコントロールされているという当たり前の事実が、今明らかに見えるようになったのである。それは一見客観的に見える様々な数値によって決定されている。数字がまるで呪文のように人々の生活を動かしてしまうのだ。

福島第一原発の事故が起る前と起った後との変化として、マスメディアが毎日幾種類かの数値を伝えるようになったということがある。新聞やテレビは、たとえば事故の当初は原子炉の温度や注入された水量を随時報道していたし、小康状態を迎えた後も東北地方から関東地方の大気中の放射線量を伝え続けている。また夏の電力消費が上がる時期には、各電力会社の供給可能な電力と予想される使用電力の割合を「でんき予報」として報道し

ていた。さらに定期的ではないものの、食品や水道水に含まれている放射性物質の濃度についての報道を含めれば、原発事故後それまでとは比較にならない数値に囲まれて人々は生活をし、またその数値に一喜一憂したり行動を自粛したりもしてきている。

数値自体が問題だというのではない。数値の高低によって、危険の大きさが変わる以上、それが人々に周知されるのは必要なことである。暴力を独占する代償として国民の安全を守ることを建前としている国家にはそれを正確に有効に伝える義務がある。しかし、実際に起っているのは数値の解釈をめぐる混乱と、「風評被害」という形で現れる、数値が拡大解釈されたことによる差別・抑圧である。

突然毎日報道されるようになった数値とそれに伴う自粛という現象は四半世紀ほど前にも見られたものである。一九八八年の昭和天皇の入院後、輸血量と下血量、それに血圧や脈拍の変化を示す数値が日々報道され、その時期の人々は生活の様々な面で自粛を強いられるということがあった。

数値が呪文のように人々の行動を抑制し、自分たちが実は自由な社会にいるわけではないことを痛感させる。人々は「不謹慎」を摘発するかのような数値が作り出す〈空気〉によって自身が支配され、同時に他の人々も自分と同じように支配されることを期待するようになる。

「自粛」という名で揮われる、抑圧・暴力こそが天皇制と原子力を最も強力な人々を支配する装置たらしめている。テロリズムは、いつ誰が被害者になるかわからないという恐怖が人々の行動を縛るものである。自分もまた「不謹慎」であると名指されるのではないか、という恐れ、それにより自分の行動・言動を「自粛」する傾向を、近年の日本社会に見て取ることができる。

そして、大江健三郎の一つの特質はそういう〈空気〉を読まない「不謹慎」さを身につけているところにある。そういえば原子力や天皇を巡る発言の中で大江健三郎は数値を用いて語ることが少ない。テキストに頻出する数字に基づいて物語を組み上げた「大江健三郎論」すら存在するにもかかわらず<sup>14</sup>、社会的発言において大江健三郎は数値に禁欲的であり、それは前節でふれた科学への批判的スタンスとつながるのだろう。

## 天皇制と暴力

冒頭で述べたように原子力と天皇制、この人々の自由を奪う二つの制度は、大江健三郎の長年のテーマであり仮想敵であり続けてきた。「壊れものとしての人間」<sup>15</sup>というタイトルのエッセイのシリーズを書いてしまうような、いくらか過敏とも言える身体を脅かす暴力への恐れが、暴力をもたらしだろ制度を正しくとらえていたわけだ。

大江健三郎が天皇と暴力やそれへの恐怖とを隣接させて語っている箇所については枚挙に遑がない。大江健三郎が天皇について語り始めたのは小説では「われらの時代」<sup>16</sup>、エッセイでは「戦後世代のイメージ」<sup>17</sup>を発表した一九五九年からである。

おまえが寝小便をやめられないなら天皇陛下におまえのチンポコを切りとってもらおう！  
その言葉、その母の強迫以後、かれにとって夜尿症は、一種の反国民的な自瀆のごときものとなり、かれはそれを恥じて死ぬほど苦しんだのであった。(中略)そしてかれは不眠症にかかって骨と皮だけに痩せほそり、膀胱は枯れて一滴の小便をも夜の床にはもらさなくなったのであった。

「われらの時代」の<sup>アンラツキー・ヤングメン</sup>《不幸な若者たち》の一員、高征黒の少年期＝戦時中についての回想では、肉体の損壊を伴う罰と共に天皇が恐怖すべきものとして語られている。確かに敗戦前、天皇の名の下に様々な暴力がふるわれたことは多くの人が語るところであるし、大江健三郎自身もエッセイで次のように語っているのはよく知られている。

天皇は、小学生のぼくらにもおそれ多い、圧倒的な存在だったのだ。ぼくは教師たちから、天皇が死ねといったらどうするか、と質問されたときの、足がふるえてくるような、はげしい緊張を思いだす。その質問にへまな答え方でもすれば、殺されそうな気がするほどだった。

おい、どうだ、天皇陛下が、おまえに死ねとおおせられたら、どうする？  
死にます、切腹して死にます、青ざめた少年が答える。

実際に天皇が「チンポコを切りと」りに来ることも無ければ、直接「死ねとおおせられ」るようなこともありえないだろう。このような「天皇」「天皇陛下」という言葉の使い方は、その威を借りて年少の者を従わせようという大人の振る舞いに過ぎないわけだが、この想像によって作り出された断片と記憶に基づく断片は天皇制のそもそものありようを正しく抉り出しているとも言えるのである。後述するように、天皇制においては天皇は自ら手を下すことは多くなく、そのかわりに天皇の名を借りた人々が不敬な、または不謹慎な

ふるまいを摘発し糾弾する。そして、社会の〈空気〉全体が糾弾を恐れた自粛を自明のものにしていく。

右翼の少年を語り手とする「セブンティーン」第二部<sup>18</sup>（一九六一年）には次のような記述もある。

原爆、戦争の悲惨、平和への希い、ヒューマニズム、そんなことはおれと関係がない、第二次大戦のあいだ、おれはほんの子供だったのだ、その光輝に関係なく、その悲惨、その原爆をフィナーレの大合唱とする悲惨にも、まったく関係はないのだ。むしろ天皇をまもるためにならニューヨオクでもモスクワ、北京へでも原爆を投げこんでやる、もし広島が赤どもの牙城になったならもう一度こんどはおれが原爆を投じてみな殺しにしてやる、それが正義だ。もし日本じゅうが赤どもだらけになり、日本人民共和国ができたなら、おれは天皇をカンヌにうつしたあと、ヒロシマ原爆の十万倍の威力をもった核反応装置で日本全土をふっとばしてやるだろう、それが天皇の子の正義だ。

「赤ども」と戦う「おれ」の夢想の中では天皇が何を希望しているのかという想像はなされない。ただ「天皇」の名の下に「おれ」自身の望みが語られるだけである。「核反応装置」で日本全土を破壊するという際にも天皇は予め局外に置かれてしまう。これは先程述べた天皇自身とは無関係に天皇の名を借りて暴力がふるわれてしまう天皇制の有り様を的確に写し出している。

そして、「おれ」は敗戦に前後して生じた事態や価値観を無視、または憎悪している。彼が現在の状況を憎む理由は、一つには自分の手許に使える原爆がない、つまり日本に原爆がないことであり、もう一つは（引用部では語られていないが）天皇に統帥権が無いことである。敗戦後の天皇制と原子力の位置づけは「おれ」には耐えがたいものなのである。

## 二つの「平和利用」

大江健三郎は前出の「戦後世代のイメージ」などの最初期のエッセイ以来、自身の少年期が戦争の時代であること、かつ敗戦後の「民主主義」という新しい価値観を受け入れ自身の思想の基盤としてきたことを繰り返し語ってきている。その際、敗戦によって周囲の大人たちに代表される日本の社会が大きく変貌したことを強調してもいる。

ただ戦時の総動員体制は実質的には敗戦後も継続し、戦後の日本の社会・産業の回復に大きな寄与を果した。断絶と継続、その意味で言うと日本の敗戦と結びついた二つの要素、すなわち天皇制と原子力は表向き変わらずに継続されながら同時に別の意味づけを与えられるようになる。天皇制を軸とする国体の護持を確認するためにポツダム宣言の受諾の決定は遅延し、しかし広島と長崎に投下され多くの被害を出した原子爆弾は結局日本に敗戦を受け入れさせることになった。一方で天皇制と原子力は敗戦後の日本社会を構成する重要な要素であり続けたのである。

「大日本帝国憲法」における「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」という第十一条や「天皇ハ法律ヲ執行スル為ニ又ハ公共ノ安寧秩序ヲ保持シ」という第九条の定めるところによって、戦前の社会では天皇が日本の軍事力・警察力などの国家という暴力装置を統御することが定められていた。さらにこの条文の続きにある「臣民ノ幸福ヲ増進スル為ニ必要ナル命令ヲ発シ又ハ発セシム」という記述は「臣民」の日常生活の維持もまた天皇の統制のもとにあるということを示している。軍事力・警察といった暴力を司るもの、人々の日常生活を統括する権利を持つ者である天皇の存在を前提にした天皇制の下でかつての日本社会は成り立っていた。その目的は列強との国際競争に打ち勝つこと、戦争に勝利することだった。

しかし、「大日本帝国憲法」の下で大元帥として日本の軍事力の統帥権を担っていた天皇は、敗戦後、前文に「平和」の重要性を謳う「日本国憲法」によって「日本国の象徴」「日本国民統合の象徴」（第一条）と定められた。

同様に兵器として使用され広島と長崎で多くの死者を生みだした原子力は発電所という形で活用されることになった。「平和利用」という言葉は元々原子力について使われる言葉であるが、戦後の日本は天皇制をいかに「平和利用」するかということ課題としてきたと言える。同時にそれは二者が元々戦争に備えて生み出されたものであることを隠蔽することをも目指している。

原子力の「平和利用」の欺瞞については前々節でふれたが、天皇制はどのように「平和利用」されてきているのだろうか。その先駆となったのは皇太子（現在の天皇）の婚約・結婚に伴う皇室の大衆化である。一九五八年終盤に正田美智子が皇太子妃になることが発表されてから、一九五九年の結婚、一九六〇年に浩宮（現在の皇太子）の誕生、そして同年のアメリカ訪問と、積極的に皇室についての情報がマスメディアを通じて国内外に発信され、頻繁に二人の姿が人々の眼にふれるようになっていった。戦争との関係が色濃い昭和天皇に変わって、戦争中にはまだ子供だった皇太子が「平和」な日本社会の「象徴」として実際の天皇即位の以前から機能し始めていた。ちなみに日本原子力研究所が創設され

たのは一九五六年、翌年最初の原子炉が臨界に達して以降、続けて原子炉が設置されていく。原子力が日本社会に浸透していく過程と皇室・天皇の戦後社会への定着の過程は重なっている。

以上のように、戦後日本の歴史は天皇制という戦争に勝つための制度をいかに「平和利用」という形で社会に定着させられるかという取り組みの歴史であったと言える。この観点に立つと、天皇制と原子力＝核、大江健三郎がこの二つをテーマとしてきたのは理由のあることに見えてくる。国家という暴力装置の一部として機能してきたものを「平和利用」の名の下に存続させることへの批判であるわけだ。

### 「平和利用」と共存する暴力

戦後の日本は天皇制と原子力を「平和利用」するべく取り組んできたわけだが、しかしそれらが本来持っている暴力を完全に押さえこめてきたわけではない。

たとえば原子力については、作業員二名が死亡した一九九九年の東海村JCO核燃料加工施設での臨界事故や、破損した配管から噴出した水蒸気で作業員五名が死亡した二〇〇四年の関西電力美浜発電所での事故が引き起こされてきた。もちろんそれ以外にも死者の出ていない事故が原子力発電所では起きている。

天皇制も同様である。戦前のように不敬罪や大逆罪で法律・制度によって身体・自由や生命を奪ったりすることはできなくなってはいるが、かわりに天皇を尊重せねばならないという〈空気〉を破った者が社会的に抑圧されることがある。大江健三郎も当事者である深沢七郎「風流夢譚」<sup>19</sup>（一九六〇年）、それに「セヴンティーン」<sup>20</sup>をめぐる暴力とそれに対応した出版社による自粛がその一例としてあげられる<sup>21</sup>。

その際には、実際に二人が死傷した上に出版社や小説の著作者に脅迫が行われるという具体的な暴力がふるわれ、関係者の生存・生活が脅かされるということがあった。それに加えて、天皇・皇室を巡る表現について、それはできるだけ慎重に取り扱わなくてはならないという自主規制・自粛を当然のこととする〈空気〉が出来上がったのでもある。そのために、「風流夢譚」と、「政治少年死す」と題して発表された「セヴンティーン」の第二部は、現在も単行本に収録されないままである。

大江健三郎自身は「セヴンティーン」について後に「国家主義的な、ファッション的な、天皇崇拜の右翼青年にも共感を感じているような、そういう人間として小説を書いていた」<sup>22</sup>と述べているのだが、前に引用した箇所にも現れているように、この小説からは天皇制への悪意も確かに読み取れる。同様に原子力に対する悪意もそれを暴力的に奪い取ろうとする人々を戯画的に描くことで示されている。大江健三郎は決して暴力を〈空気〉としてあいまいなものとすることはせず、「不謹慎」に顕在化させ続けている。

「ピンチランナー調書」<sup>23</sup>（一九七六年）の主人公「森・父」は元原子力発電所の技師で、運搬中の硝酸プルトニウムをテロリストから守るために被曝した経験を持つ。

しかしおれたちが停車するやいなや、幌付き小型トラックから跳び出して来るやつらの様子は、発電所の運転手と助手の喚き声にもっともよく反映していたと思うよ。ふたりはむしろ自分たち自身を恥かしがり、腹を立てている声で、こう怒鳴ったんだ。

——なんだ、なんだ、なんだ？　ありゃ、いったいどんなものだ？

——なんだ、なんだ、なんだ？　こりや、いったいどんなふうだ？

小型トラックの後尾の幌をぱっと撥ねあげて五、六人が若わかしく跳び出してきたんだが、連中は『オズの魔法使い』の「ブリキマン」、あれそっくりの恰好をしているんだよ、ガチャガチャ金属音をたててさ。（中略）

——なんだ、なんだ、なんだ、ありゃ、いったいどんなものだ？

——なんだ、なんだ、なんだ、こりや、いったいどんなふうだ？

（中略）頭からすっぽりフードをかぶる米軍放出の外套に、重そうな金属板をやたらにゆわえた、その「ブリキマン」の扮装は、科学的な計算によるのではなく、内面の漠たる惧れのみで動かされて製作した対放射能の防護服だろうじゃないか？　だとすれば、すでにおれたちの背後の荷台に乗りこんでゴトゴトやっている「ブリキマン」どもは、おそらくこの国で最初の核物質略奪者なんだ……

放射線から身を守るために『オズの魔法使い』の「ブリキマン」「そっくりの恰好をしている」テロリストたちの姿自体が滑稽なものであるが、それに対する同僚達の反応も場違いで間の抜けたものだ。自分たちの運搬しているものが危険物であるという自覚の欠如、だからこそ過剰な恐怖心が生み出した略奪者たちの扮装に不用意な驚きを示すしか無かったわけだ。しかし、ここで滑稽な状況を作り出したのは、原子力発電所の使用済燃料棒から生み出された「核爆弾を二十箇所も作れる核物質」である。「平和利用」のための原発こそが核兵器を生み出している、という状況はグロテスクでもある。そして原子炉を廃炉にしたとして、更に残る問題が使用済燃料棒の処置であることも付け加えておこう。

「ピンチランナー調書」から二十年後に発表され始めた「燃えあがる緑の木」の第三部「大いなる日に」では、愛媛の佐多岬にある原子力発電所（実際にはその場所には伊方原発がある）が「災厄と滅亡の機械」と名指され、「燃えあがる緑の木」の教会」のデモ行進と祈り（信者たちは「集中」と呼んでいる）、の直後発電機の故障が起り一時的に停止するという事態が語られる。小説の語り手は「集中」と原発の停止の間に因果関係を見出すような語りをしているわけではないのだが、かえって「教会」の外部の人間が二つを結びつけて、中心人物のギー兄さんを糾弾する。

阿川原発前の集会で、あなたが祈ったとおりに事故がもたらされた、という件ですが、あれは事実ですか？

——私たちは、原発がすべての作動を止めることになるようねがっています。そのために、行進参加者の全員が祈ったことは事実です。私たちは集中と呼んでいます……そして、それと因果関係があったかどうかはわかりませんが、阿川原発が事故で作動を一時停止したことは事実です。

——もし、あの事故が大規模な爆発へと連鎖して、発電所の町の、電力を無料で供給されている範囲どころか、もっと広範囲の市民たちを殺し、四国の半分と九州の半分以上を強力に汚染させるものだったとしたら、どうですか？

記者会見でのマスメディアの記者とのやりとりの一部であるが、このやりとりがグロテスクかつ滑稽なのは（質問者がギー兄さんがどういう答え方をしても「教会」の信仰を批判できるように罫をしかけているのはさておき）原子力発電所の危険を訴えるグループを批判する際に、危険性を前提としながら、その問題意識を共有しようとはしていない点にある。原子力発電所が引き起す事故がそれほど危険なものであるなら、その存在自体を問題化できるはずなのに、それを等閑視する。また、危険なものの存続を許している自分たちを、あたかも何の罪も無いものとして棚上げしながらこの質問は発せられている。

「燃えあがる緑の木」に続けて発表された「宙返り」<sup>24</sup>（一九九九年）では、前作と連続する小説世界に原子力発電所をテロリズムの武器としてその暴力性を解放させようとする新興宗教団体が登場する。

——かれらが構想していたのは、日本の右翼が戦前に企てていたことのある一人一殺のテロと、こちらはまさに戦後の特質のものですが、意図的に原発事故を引き起こすことでした。その上で、なおかつ生き残れば、本当の悔い改めの千年王国を作ることです。

チェルノブイリ以後も、この国には原発の大きい事故はありえない、と政府も電力会社も宣伝しています。NHKはじめ大新聞も同調している。原発の事故が重大なものになることはまあないだろう、とナショナルコンセンサスができあがってる国じゃないでしょうか？ 日本人には大組織の独占する情報と技術への信仰が強いからです。（中略）

そこで、日本と日本人の、原発についての固定観念をどう揺さぶるのか、そのために、どの地域の原発で、どの規模の事故を起すかが、伊豆の原子力問題の専門家の研究課題でした。

生み出される恐怖のあり方が全く異なる「一人一殺のテロ」と「原発事故」とを並べるということに、この「構想」の大きな歪みが現れている。「一人一殺のテロ」であれば、暴力への恐怖はテロリストと相反する立場に立つ者たちだけに分け持たれることになるが、「原発事故」が揮う暴力は無差別に人々を脅かす。批判の対象になっている政府・電力会社・マスメディアによる原発の安全についての宣伝は想像力の欠落に支えられてきたが、この「千年王国」の「構想」にも同じ欠落が共有されている。故に主宰者によるそれまでの信仰を覆す「宙返り」が行われ、この団体は十年間休止することになるのではあるが。

以上のように、原子力や天皇制が「平和利用」対「軍事利用」という偽装の二項対立を超えて暴力によって貫かれていることへの鈍感さを持つ人々と、逆に敏感すぎる感覚を持つ人々が大江健三郎の小説には登場し対比させられている。大江健三郎の署名を持つテキスト全体が暴力への敏感な感覚に支えられ続けているのは繰り返し強調しておくべきことである。では、その暴力からいかに逃れることが可能なのか、「宙返り」の引用の様に暴力に暴力で応じる以外の選択肢はあるのだろうか。

### 国家からの離脱へ向かう想像力

福島第一原子力発電所の事故で原子力とその暴力をごまかしようもなくさらけ出したように、天皇制の暴力が思いがけない形で今後発揮されることもあるかもしれない。天皇制や原子力といった潜在的に暴力を生み出しかねない装置を実装する国家、それに連動した資本が人々を抑圧してきた、これからも抑圧していく、ということについて大江健三郎の

批判が向けられ続けている。

直接の批判だけではなく、抑圧的・暴力的な国家やそれと癒着した巨大資本からの脱出をはかろうとする人々、相互扶助的な小集団を描いている。

その原型として大型トラックでの放浪を夢想する「われらの時代」の《不幸な若者たち》や、遠洋航海用のヨットでの日本脱出を欲望する「叫び声」<sup>25</sup>（一九六二年）の三人の青年たちがいる。そして冒頭で題名をあげた「洪水はわが魂に及び」の「自由航海団」にいたって、小集団は意識的に国家からの脱出を目指すようになる。

政治的なものの好きな人間は、いま権力をにぎっているか、明日にぎるかという人たちでしょう？　そしてそれぞれに正しくて強いわ。わたしたちは正しくも強くもないから、そんな人たちにドサクサまぎれに殺されないように海に逃げ出して行くという集団なんだから。（中略）本当に全体そろったクルーザーを手に入れることができれば、「自由航海団」はすぐにでも海に出るわ。喬木の計画では、乗っている者みんな日本の国籍を離れるのよ。喬木が調べたけれども、憲法にその権利が認めてあるんだって？

——第二十二條だ……

——そうすればわたしたちは「自由航海団」という国の人間になるから、誰からもおしつぶされないで生活できるよ。強くて正しい人間とは無関係に、ただ航海しながら暮せるわ。

この後来るであろう大地震の後に生じる社会の強者からの迫害に備えて「自由航海団」のメンバーは日本という国家からの離脱を希望している。彼らのほとんどは集団就職で東京に集められながら、資本に利用されることに甘んじられなかった、または資本の回転からはみ出してしまった人々である。生田武志『ルポ最底辺 不安定就労と野宿』<sup>26</sup>によると、大阪の釜ヶ崎地区の日雇労働者の多くが「集団就職層」であるという。彼らに仲間を見つけることの出来なかった〈自由航海団〉の未来の姿を重ねることもできるだろう。同書では、一九八二年の時点で既に、原子力発電所関係の求人には気を付けるように、という啓発が労働福祉センターによって行われていたということも紹介されているが、癒着した国家と巨大資本は一度そこから離れた弱者を見逃そうとせず、暴力装置の中に取りこもうとしてきたわけである。

強者の圧倒的な暴力を恐れる弱者の集団はその後、「懐かしい年への手紙」<sup>27</sup>（一九八七年）の「根拠地」、「大いなる緑の木」の「大いなる緑の木」の教会、「宙返り」の「新しい人」の教会へと連なっていく。彼らは国家や巨大資本・マスメディアと距離を取ってそれらに一方的に利用されないようにしながら、自分たちの集団を資本主義とは別の価値観の元に維持しようとする。

これまで見てきたように大江健三郎は直接的に暴力を発揮する国家・行政と企業などの癒着した体制に対する批判を行いつつも、生活に不可欠なライフラインをコントロールすることで人々を支配する側面については、明確に問題化しているとは言い難い。ただ、住居・上水道・電気といった直接のライフラインではなく、人間が生きていく上で必ず生じてしまう排泄物の処理——通常は市町村が管理する下水道設備が担っている——の問題を取り上げることで、そこにふれている。国家・行政の管理によるのではなく、小規模の集団が生活を維持していくために自律的にかつ周囲の環境をできるだけ変更することなく、インフラを整備するイメージを描いている。

「河馬に噛まれる」<sup>28</sup>（一九八三年）では小説中の呼称で「左派赤軍」の浅間山荘の事件にまつわる一挿話として、語り手の小説家と事件にかかわった少年との交流が紹介され、さらに成長し作中で「河馬の勇士」と呼ばれる青年の現在へと接続していつている。

破局が事件として顕在化するまでを追う、「左派赤軍」の若者らがこもった山岳ベースにはじまる報道特集のフィルムを見るうち、深い印象を受けるシーンがあったのだ。山岳ベースの建物裏の、沢へとくだる斜面に糞便の池ができていた。それをカメラが一瞬だけとらえるのへ、報道記者が、——この汚物の量には、ある浅ましさを感じました、と眉をひそめる具合にコメントしていた。逆に僕は、湧き水を利用して糞便を沢へ誘導し、たくみに大量の糞便をためた仕方に、感心するようであったのだ。若い男女ら多数が、山中で集団生活するとして、これだけの量の糞便が、処理せねばならぬものとして出てくる。それは自然なことだ。かれらの思想と行動を批判する理由があるにせよ、糞便自体が、倫理的に問題にされるのは正しくないのではないかと。むしろあれだけの糞便を、なんとか建物から離して、沢に流れこませる通路をつくった、その工夫と実際の仕方には、ある人間らしさといつてしかるべきものがあったのではないかと。

少年は文通相手の作家に、時間があればこの設備をさらに発展させ、大量の糞便が「こまやかに砕かれて原形をとどめなくなる」ようにしてから溪流に流す装置を作る構想だっ

た、と語る。理由としては下流の人々に「左派赤軍」のベースの存在を気づかせないための工夫だというこの装置は、しかし結果として糞便を環境の中で分解・吸収させるのに役立つものになっていたと言えるのである。この手作り（大江健三郎の好む言葉を使えば「器用仕事」）の下水設備で小集団の生活を維持するイメージは、国家や行政、それに巨大資本が巨大なインフラ（もちろん原子力発電所も含まれる）を一元的に維持・経営して人々の生活を管理している状況に対する別の選択肢の可能性を示唆している。国家の中にいながら国家からの独立性を保つためには、小規模でも自前のライフラインを確保するしかない。

もっとも、大江健三郎が描き出す相互扶助的な小集団がすべて内部から自壊する形で崩壊するのは、国家や巨大資本に取りこまれず批判的な距離を取り続けることの困難さを表してしまっているということでもある。

最初の節で述べたように本論は現在の状況をふまえて大江健三郎を読み直す、ということを目指しているので、では、大江健三郎の小説が提示している別の選択肢をどう発展すべきかという難問に入りこんでいくつもりはない。その代わりに、今回論じた原子力や天皇制のテーマ以外にも、大江健三郎の小説が選択肢・可能性を示してくれる問題がありそうだという期待を感じたことを最後に記しておく。

## 注

- 1 反核のテーマで単行本としてまとめたものには『ヒロシマ・ノート』（岩波書店、一九六五年）、『核時代の想像力』（新潮社、一九七〇年）などがある。
- 2 「アトミック・エイジの守護神」（『群像』一九六四年一月号）、「核時代の森の隠遁者」（『中央公論』一九六八年八月号）といったそれらの言葉をタイトルに使っている小説もある。
- 3 新潮社、一九七三年。引用は『大江健三郎全作品5（第Ⅱ期）』（新潮社、一九七七年）による。
- 4 第一部「「救い主」が殴られるまで」『新潮』一九九三年九月号、第二部「揺れ動く〈ヴァシレーション〉」『新潮』一九九四年六月号、第三部「大いなる日に」『新潮』一九九五年三月号。
- 5 「宗教的な想像力と文学的な想像力」一九九七年五月十日に行われた講演の記録、『鎖国してはならない』（講談社、二〇〇一年）所収。引用は講談社文庫（二〇〇四年）による。
- 6 角川書店、一九六一年。
- 7 「諷刺、哄笑の想像力」『新潮』一九七六年一月号。引用は『大江健三郎同時代論集 未来の文学者』（岩波書店、一九八一年）による。
- 8 新潮社、一九六二年。
- 9 たとえば「力としての想像力」（『図書』一九七三年一月号、『大江健三郎同時代論集 9』岩波書店、一九八一年、所収）を参照。
- 10 たとえば重藤文夫・大江健三郎『対話原爆後の人間』（新潮社、一九七一年）を参照。
- 11 たとえば『状況へ』（岩波書店、一九七四年、『大江健三郎同時代論集 9』前出、所収）を参照。
- 12 原子力開発を主導していた理化学研究所の公式サイトでも戦前との研究の連続性が語られている。「理研八十八年史から」  
<http://www.riken.jp/r-world/info/release/riken88/text/no08.html>。
- 13 『平成21年版原子力白書』原子力委員会、二〇一〇年。引用はインターネット公開の文書による。<http://www.aec.go.jp/jicst/NC/about/hakusho/hakusho2009/1.pdf>
- 14 蓮實重彦『大江健三郎論』青土社、一九八〇年。
- 15 『壊れものとしての人間——活字のむこうの暗闇——』講談社、一九七〇年。
- 16 中央公論社、一九五九年。引用は『大江健三郎全作品2』（新潮社、一九六六年）による。
- 17 『週刊朝日』一九五九年一月四日～二月二十二日（雑誌掲載時のタイトルは「無分別ざかり」）。引用は『厳粛な綱渡り』（文藝春秋、一九六四年）による。
- 18 『文學界』一九六一年二月号。引用に際して新漢字に改め、仮名遣いの一部を変更した。
- 19 『中央公論』一九六〇年十二月号。
- 20 第一部『文學界』一九六一年一月号、第二部は前出。
- 21 一連の事件の意味を詳細に分析としたものとして渡部直己『不敬文学論序説』（太田出版、一九九九年、二〇〇六年にちくま学芸文庫より増補版が出ている）がある。
- 22 大江健三郎『大江健三郎 作家自身を語る』（聞き手・構成尾崎真理子）新潮社、二

〇〇七年。

23 『新潮』一九七六年八月～十月号。引用は『大江健三郎全作品6（第Ⅱ期）』（新潮社、一九七七年）による。

24 上・下巻ともに講談社、一九九九年。

25 『群像』一九六二年十一月号。

26 筑摩書房、二〇〇七年。

27 講談社、一九八七年。

28 『文學界』一九八三年十一月号。引用は『河馬に噛まれる』（文藝春秋、一九八五年）による。